

校長 吉川 敦

皆さん、おはようございます。

平成 20 年度の学年もようやく春休みになります。二週間前、三月二日には高校の卒業式があり、本日の午後には中学の卒業式があります。そういうわけで、ここには中学一年、二年、高校一年二年の四学年の生徒の皆さんしかいませんが、ここにはいない二学年の人たちも含めて、この一年よくがんばってきました。

がんばってきたといえ、わたくし自身、ほぼ一年前に附設の校長に就任し、手探りでここまでやってきました。実は、着任前に、「和而不同、和して同ぜず」というのが本校のモットーだと聞かされました。これは「論語」(子路第十三)の一節、「子曰、君子和而不同、小人同而不和」から採られたものですが、わたくしには校訓としていまひとつ納得が行きませんでした。

なぜでしょうか。それは、およそ物事には「基本と応用」というべき段階の区別があるけれども、その立場から見ると、この「和而不同」は「応用」というか態度を示すもので「基本」をなすものとは看做せないと思ったからです。もちろん、文脈的には、「基本」は「君子」であることは明らかですから、「君子であれ」というのが隠れた校訓だと言ってしまうば身も蓋もないのですが、それなら、何も隠しておくことはありません。

赴任以来、附設の歴史をあさっているうちに、原巳冬先生、この方は中学校の創設に当たられた方ですが、原先生が、高校創立当初の板垣政参先生の建学の精神を「国家・社会に貢献しようとする為他の気概をもった誠実・努力の人物の育成」と整理されたことを知りました。「為他」というのは「他のため」ということですが、「正法眼蔵」という書物にある言葉で、「泥だらけになると知りつつも他のために敢えて跳びこんで仕事をする」というような文脈で使われています。出典については立花純二先生に教わりました。

「為他の気概」は、したがって、「人のため世のために正しいことを果たそうとする信念」ということになります。「基本と応用」に戻りますと、まさに、「為他の気概」こそが「基本」であって、しかも、「君子」というような取り澄ました感じもありません。「和而不同」は、こうして、その「応用」の過程にあるものとして、理解できます。

昨年秋に、このことに気づいてから、附設のモットーは「為他の気概」であるという趣

旨のことを機会があるたびに言うようにしてきました。残念なことは、先日卒業した高 3 の諸君には、このことを十分に伝えられなかったことです。実際、高校まで含めた本当の全校的な集会は多くなくて、ここにいる高 1、高 2 の皆さんには校長として学校のメッセージを発信する機会はこの場を含めて後は数回しかありません。特に、高 2 の皆さんには、今年度の例で行くとすると、後 1 回しかありません。先日の卒業式でも、卒業生総代の答辞では、キーワードとして「和而不同」が使われていました。高 3 との縁が、実質的には「男く祭」で切れてしまっていて、それ以降のわたくしの附設についての勉強の結果を伝えられなかったからだと大変申し訳なく思いました。この部分の手当てというかパッチ当ては、本校のホームページ表紙のインフォメーション、高校卒業式のところに式辞を貼ってもらう形で行ないました。皆さんにも見ておいてほしいと思います。

話は前後しますが、「基本と応用」とは英語で言うならば、むしろ、「Theory and Practice」と申せましょう。直訳は「理論と実際」となりますが、ともすると、「建前と本音」のような、「理論」と「実際」が相反するものであるかのような了解が付いてまわります。しかし、「Theory and Practice」の本来の意味はそうではありません。「理論」とは、ものごとの本質を洞察して整理したものです。「理論」の根幹、これこそまさに「基本」ですが、それに現実に即して適切かつ具体的に細部が補われたもの、こちらが「応用」ということとなります。つまり、「理論と実際」、あるいは「基本と応用」でも同じことではありますが、ある事柄についての判断または分析の段階あるいは範囲の違いを表しているのであり、決して「建前と本音」のように、どちらかと言うと、感情の流れに即していて論理的には二律背反に近い意味を許容している表現ではありません。

さて、この集会は実は本年度の修了式です。式辞の基本は、修了式という場での訓示です。なかなか全校的に学校としてのメッセージを校長が発信する機会がないということで、こんな応用を試してみました。

修了式という「基本」に戻りましょう。皆さんは、今年度学んだことについて、一体、「基本」がきちんと身についているかどうか、新年度を迎えるためにも、しっかりと振り返ってみましょう。これからも、もっとも基本の部分は何か、何が一番本質的なのか、新しいことに会うたびにその基本や本質に思いを馳せて、それらを見抜こうとする姿勢を心掛けてください。そして、何事にせよ、基本は何か、本質は何かと、常々反復反芻して考えをめぐらしてほしいと思います。

それでは、また、四月に会いましょう。